2009 年 11 月 25 日放送

漢方医人列伝 「山脇東洋」

二松学舎大学　東アジア学総合研究所　准教授　　町　泉寿郎

山脇東洋について

山脇東洋は、医師清水立安（号を東軒）と母駒井氏の間に、その３男として生まれました。寳永２年１２月１８日（西暦１７０６年）のことです。清水立安は丹波亀山出身で、京都に出て山脇家二代玄脩（はるなが、１６５４～１７２７）に学んで開業しましたが、東洋が幼い時に亡くなりました。東洋は、幼名を橘五郎、元服後の名を尚徳（たかのり）、字を玄飛・子樹（本名以外の呼び名）、通称を道作（医者としての呼び名）、別号（ペンネーム）を移山、後に東洋を称しました。

弟源吾ともども母に厳しく養育された東洋は、その早熟の才を亡き父の師である山脇玄脩（はるなが）に愛され、享保１１年１１月（西暦１７２６）２２歳でその養子となりました。山脇家は、京都在住の江戸幕府医官として、三雲家（代々法印）とともに代々法眼に任ぜられる名家であり、翌享保１２年に養父が亡くなったため、２３歳でその家督を継承し、同１４年に２５歳で法眼に任ぜられました。陰陽五行説に基づく内経医学を否定し、『傷寒論』の処方に根拠を置く古方派の大家として知られ、人体解剖に先駆的な業績を残しました。宝暦１２年（１７６２）８月８日５８歳で亡くなり、深草霞谷（現在の伏見区深草）の真宗院に葬られました。

山脇東洋の学術上の師承関係

山脇家の医学は、元来、山脇家の初代道作（１５９７～１６７８）が曲直瀬玄朔の門人で、後水尾天皇から霊元天皇まで五代に仕え、「養寿院」の称号を許された名医で、以来、その甥である２代玄脩も曲直瀬流の後世派医学を基調としました。

それに対して東洋は、初め渡辺葭谷に儒学（宋明の性理学）を学びましたが、家督の頃からは晩年の後藤艮山（１６５９～１７３３）に就いて古方派医学を学びました。師の艮山は４６歳年長に当たり、その高弟である香川修庵（１６８３～１７５５）は２２歳年長の先輩に当たります。同門の先輩の香川修庵が儒学を伊藤仁斎に学んで、その高弟としても知られたのに対して、東洋は４０歳前後から主に荻生徂徠門下で萩藩儒の山県周南、およびその門人との交流を通じて徂徠学を吸収しました。東洋は京都における徂徠学受容の先駆者の一人というべきであり、これを通して儒学・医学ともに古今の別があることを悟り、独自に古方医学を専攻していきました。東洋の著書『養寿院医則』には、荻生徂徠『学則』からの影響が見られます。

萩藩出身の永富独嘯庵・栗山孝庵は、ともに東洋の高弟に数えられますが、永富独嘯庵は東洋に命じられて東洋の二男東門（１７３６～１７８２、山脇家４代）とともに、越前府中に赴き奥村良竹（１６８７～１７６１）に就いて吐法を学びました（１７５２）。栗山孝庵は、主に観蔵（人体解剖）の方面で東洋の学術を継承しました。

そのほか、吉益東洞（１７０２～１７７３）が京都で開業したての若く貧窮していた時代に、東洋がいち早くその才能を見抜き、これを援助するとともに、古方書の会読なども一緒に行ったといわれています。古方派の医者としての東洋は、１８世紀後半以降の吉益東洞が圧倒的な影響力のかげに隠れがちですが、４代東門のあと５代東海、６代東圃、７代東洲と継承したほか、東門の門下に著名な原南陽（１７５２～１８２０）が出るなど、江戸後期の医学の展開に一定の影響力を持ったことは、忘れるべきではありません。

山脇東洋の業績

山脇東洋の学問的業績としては、次の２点をあげることができます。

（その 1）古方書の文献研究への道を開いたこと。

（その 2）古代中国医学で説かれている人体を実見するために、解剖を行ったこと。

古方書の文献研究については、親交のあった明石藩儒梁田蛻巌を京都に招待した折に、蛻巌を飽き飽きさせるほど、『傷寒論』について質問をしたという逸話が残っていますし（『杏林雑話』）、また実弟である清水源吾（敬長）に、延享３年（１７４６）に『傷寒論』の異本である『金匱玉函経』８巻を翻刻（リプリント）させています。いずれもその『傷寒論』研究への熱意の表れと見ることができます。

同じ延享３年（１７４６）に東洋は、唐代（西暦７５２年）の王燾撰述にかかる医学全書『外台秘要方』４０巻の翻刻を行いました。『外台秘要方』は、唐以前の多数の医書から

出典を明記して引用しており、いわゆる古文献の「輯佚校勘」のうえで貴重視されます。「輯佚校勘」とは、現在伝わっている本文との異同を比較検討したり、既に散逸した本文を復元したりする文献研究の方法を言います。江戸中期の日本では、印刷本の『外台秘要方』はほとんど流通しておらず、稀にある写本は誤写が多くて使用に堪えませんでした。そこで、友人の幕府医官である望月三英が明版（明代に刻した版木で印刷された本）の『外台秘要方』を所蔵することを知った東洋は、望月三英の許可を取り付け、私財を投じてこれを底本としてその翻刻（リプリント）を行いました。できるだけ文献上の価値を高めようと、幕府から宋版（宋代に刻した版木で印刷された、明版より善い本）を借り出して一部校訂作業も行っています。

江戸前期における中国医書の翻刻は、中国から輸入される最新医学書に返り点・送り仮名を施して提供することでした。これに対して、東洋の翻刻本には訓点は全く加えられておらず、原本の再現（および宋版との異同）があるだけです。最新知識ではなく、古い時代の医学を研究するための文献資料として、この本が翻刻されていることがわかります。もっとも、東洋の場合は内経医学を否定しますから、あくまで『傷寒論』などの処方集に対象が限られます。また、今日ではより質の高い宋版が知られているため、明版もこの翻刻も殆ど問題にされませんが、ともあれ江戸時代にこの翻刻が医学の文献研究に一定の役割を果たしたことは事実であり、江戸後期に考証学派によって盛んになる文献研究法と文献資料翻刻の先駆的な業績として、学術史的な価値を認めることができます。そのため、古方派に厳しい評価を下すことが多い江戸の考証学派も、東洋に対しては好意的な評価を示しています（『養寿院方函』の伊沢蘭軒序など）。

もうひとつ、より広く知られた東洋の業績といえば、刑死体を用いた人体解剖（当時の用語で言えば観臓）があげられます。早くから従来の五蔵六府説に疑問を感じていた東洋は、ある時その疑問を後藤艮山に投げかけたところ、艮山は実際に人体解剖してみるのが一番なのだが、それは許されていないから、代わりに獺でやってみなさいと答えました。早速、獺を解剖してみると、肺・心・肝・脾・腎と胆・胃・膀胱・腸の九つの臓器があったけれども、小腸は見当たらなかった。調べてみると中国の先秦時代の文献（『周礼』など）では九蔵というが、十一蔵や大小腸のことは見えない。疑問を抱いて以来１５年、漸く機が熟して宝暦４年閏２月（１７５４年）５０歳のときに初めて解剖を行い、日本初の解剖図誌とされる『蔵志』を纏め刊行しました。先に山田慶児先生が指摘されたように、東洋の解剖は近代的な意味での解剖というよりも、中国古代文献の記載の確かさを実見によって確認する意味が強いものでしたから、これを以てすぐに古方派の「親試実験」が近代的な医学への道を切り開いたと意義付けるには、留保が必要だと思います。しかしながら、東洋にとっての解剖は、古いものを復活する形式を取って従来の考えを否定し次の時代を開拓していった点において、既に述べた吐方復活への意欲や古方書の翻刻などと共通するものであり、（これを西洋におけるルネサンス運動になぞらえる方もありますが）、そこに山脇東洋という人物が持つ意義があると思います。